



Title	紀海音と『和漢朗詠集』
Author(s)	富田, 康之
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 117, 67-81
Issue Date	2005-11-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34093
Type	departmental bulletin paper
File Information	117_PR67-81.pdf



紀海音と『和漢朗詠集』

富 田 康 之

はじめに

近松門左衛門の浄瑠璃作品に関して言えば、既に『近松語彙』（附録・典據目録）の中で『和漢朗詠集』との関係が具体的に指摘されている。利用数の多さからみても、近松の浄瑠璃制作上重要な典拠の一つであったと考えられる。では、同時代の浄瑠璃作者である紀海音の場合はどうであったのだろうか。結論を先取りすれば、海音も近松同様に『和漢朗詠集』中の多くの和歌・詩文を利用しているのである。この事は、両者の典拠利用の方法的差異、あるいは和歌・詩文の選択傾向等、興味深い問題も孕んでいるように思われる。そこで今回はその最初の課題として、海音の利用状況をまず具体的に指摘し、その上で今後の見通しについて若干述べてみたいと思う。

『和漢朗詠集』の利用状況

最初に、海音が『和漢朗詠集』の和歌・詩文をどの作品のどの段で利用したのかを表に纏めてみる。但し、この調査は時代物のみを対象とした。また、『熊坂』、『三井寺開帳』、『山栴太夫恋慕湊』、『山栴太夫葭原雀』、『大友皇子玉座靴』は使用例がない為、表から除外した。なお、表に於ける△は和歌、▲は詩文からの利用を表すものとする。

【和漢朗詠集】利用状況一覧表

	一段	二段	三段	四段	五段
『鬼鹿毛無佐志鑑』				▲	
『鎌倉尼將軍』	△			▲ ▲ ▲ △	
『信田森女占』	▲			▲ △ △	
『小野小町都年玉』					▲
『曾我姿富士』			△		
『愛護若婿箱』				▲	▲
『仏法舍利都』		△		△	
『甲陽軍鑑今様姿』			▲	▲	
『新百人一首』		▲			△
『未廣十二段』	▲ ▲			△	

	一段	二段	三段	四段	五段
『鎌倉三代記』				▲	
『義経新高館』				△	
『神功皇后三韓責』			▲ △		
『頼光新跡目論』				▲	
『鎮西八郎唐土船』	▲ △			△	
『日本傾城始』		△		△	
『三輪丹前能』				△	
『八幡太郎東初梅』	△		▲ △	▲ ▲ ▲ △	
『吳越軍談』			▲		
『富仁親王嵯峨錦』	△	▲	△	▲ △	

『花山院都巽』		一段			
『傾城國性爺』		二段			
『本朝五翠殿』	△	三段			
『新板兵庫の築島』	△ ▲	四段	▲	▲	
『殺生石』	▲ △	五段			

『坂上田村麿』		一段			
『東山殿室町合戦』	▲ ▲	二段			
『玄宗皇帝蓬來鶴』	▲	三段	▲		
『傾城無間鐘』	▲ △	四段	△		
『忠臣青砥刀』	▲ △(上之卷)	五段			

表より見れば、海音の時代物浄瑠璃三五作品中、三〇作品で『和漢朗詠集』からの利用が認められる。和歌・詩文の利用数は、一段目で和歌六箇所・詩文九箇所、二段目で和歌二箇所・詩文三箇所、三段目で和歌八箇所・詩文七箇所、四段目で和歌一五箇所・詩文一八箇所、五段目で和歌一箇所・詩文四箇所となっている。全体を通しては、和歌三二箇所、詩文四一箇所。両者合わせて七三箇所となっている。最も特徴的な点は、海音が製作したどの浄瑠璃作品にもほぼ偏りなく利用していることである。また、四段目での利用が他の段の利用に比して格段に多いことも見て取れる。^(注2)

利用箇所

それでは、個々の具体的な利用の実体を提示してみたい。その場合、『和漢朗詠集』の引用は原則として『和漢朗詠集註』(寛文十一年刊、中野小左衛門板行)を基にした。詩文の返り点については同書の表記に従った。また、作者名

『紀海音と『和漢朗詠集』』

は『和漢朗詠集註』より抜き出し括弧内に記した。なお、振り仮名、送り仮名等は便宜上省略した（詩文の訓読は『和漢朗詠集』（寛文七年刊）と対照したところ若干の揺れが見られる部分もあり、ここではその判断を保留した）。

掲載の手順としては、○印の下に『和漢朗詠集』の見出しを掲げ、次に本文を示し、更に括弧内に作者名を記した。その本文を利用した海音作品の詞章を●印の下に記し、括弧内に作品名と段数を示すものとする。

○立春 今日不知誰計会春風春水一時来 （白）

●誰か百年たもつべき。栄花は一時の春の風終に龍門原上に （『新板兵庫の築島』第三）

○立春 春たつといふはかりにやみよしのゝ山もかすみて今朝は見ゆらん （忠岑）

●春立ツといふばかりにや松杉の。並木もけしきにこやかに霞初たる檜皮ぶき。 （『八幡太郎東初梅』第三）

○早春 氣霽風梳新柳髪水消浪洗舊苔鬚 （都良香）

●風のけづりし新柳も。散がてになる秋の色。 （『花山院都巽』第四）

●かぜ新柳をけづれ共角前髪もいたづらに。びん水結ふ水さへとくるもしらぬ前帯に。 （『八幡太郎東初梅』第三）

●君が代をみぎはの水とけぬれは。莓のひげをも洗ふよ。しづはた布を玉河に （『富仁親王嵯峨錦』第四）

○春夜 春の夜のやみはあやなし梅の花色こそ見えねかやはかくるゝ （躬恒）

●はこぶ和かうのさげあんど闇はあやなし神主の。娘とするきかしはでや。 （『玄宗皇帝蓬來鶴』第四）

○閏三月 花悔帰根無益悔鳥期入谷定延期 （清原滋藤）

●花は根に鳥は。ふるすにかへれ共行て。返らぬ死出の道 （『鎌倉三代記』第四）

○雨 あをやきのえだにかゝれる春雨は糸もてぬける玉かとそ見る （伊勢）

●こぼるゝ涙青柳の。糸につながぬ玉なして風にもまるゝごとく也。

(『傾城無間鐘』第二)

○梅付紅梅 君ならで誰にか見せん梅の花いろをも香をもしる人ぞしる (友則)

●色をも香をもしる人ぞ。しるべ有げな心ざし

(『末廣十二段』第四)

●只一騎色をも香をもしる人に。しらすくつわのりんくゝ

(『鎮西八郎唐土松』第一)

○花付落花 誰謂水無_レ心。濃艶臨_レ兮波變_レ色。誰謂花不_レ語。輕漾激_レ兮影動_レ脣。

●げいようげきしてかげ口びるをうごかせば。花の物いふは道理なるや。

(『信田森女占』第四)

○花付落花 とのもりのとものみやづこ心あらば此春ばかり朝きよめすな (公忠)

●常香もりは衛士の役。とものみやつこ朝清め。鐘つきぼんが御垣守。

(『富仁親王嵯峨錦』第三)

○夏夜 風吹_ニ枯木_一晴天雨月照_ニ平沙_一夏夜霜 (白)

●羽風にこぼく吹折て。

(『末廣十二段』第二)

●いづれあふせは秋ざれも。みじかきなつのよるの霜。おもりの糸のむすばれず。

(『東山殿室町合戦』第四)

●てんかういなつまはたゝがみ風は枯木を吹折て雨は車のじくよりも。

(『忠臣青砥刀』上之巻)

○納涼 松かげに岩井の水を結びあけて夏なき年と思ひける哉 (惠慶)

●千代のためしを松かげのいわるの水は葉にて。

(『傾城國性爺』第三)

○花橘 さつきまつ花たちばなのかをかげば昔の人の袖のかそする (伊勢)

●花橘のほめくは昔の袖の雨ならで。五月を雲の役目とや。

(『新板兵庫の築島』第三)

●さつき待。花橘の香をかげは。昔の人と。詠しに我は。梢の秋待て。

(『富仁親王嵯峨錦』第四)

●みゝにてもきくはなでもかぐ。花橘のかをとめし。昔の人の袖ならで。いきてわかれしつまを恋。

（『忠臣青砥刀』中之巻）

○蓮 はちすばのにごりにしまぬ心もて何かはつゆを玉とあざむく（良僧正）

●めでたきおりの気なぐさみ。にごりにしまぬはちすばの其採蓮の曲なして。

（『神功皇后三韓責』第三）

●三尺計の太刀作りおでいにそまぬはちす葉の。さびずくもらず清らかに

（『忠臣青砥刀』上之巻）

○秋興 林間煖_レ酒焼_二紅葉_一石上題_二詩拂_二緑苔_一（白）

●中間小者やり持らりんかんに酒あたゝめ。

（『信田森女占』第一）

○秋夜 あしびきの山鳥のおのしだりおのながくしよをひとりかもねん（人丸）

●あしびきの。山鳥の尾のしだり尾の。ながくいふも語るのも。

（『新百人一首』第五）

○八月十五夜付月 三五夜中新月色。二千里外故人心（白）

●三五夜中の月の色。海まんくたる

（『本朝五翠殿』第五）

●平等利益の新月は。二千里の外あきらかに。生滅めつちの雪の色都の。富士の名もしるき。

（『愛護若蛸箱』第五）

○八月十五夜付月 楊貴妃帰唐帝思李夫人去漢皇情（源順）

●叶はぬ物は恋成よな。やうきひかへつて唐帝の思ひ李夫人去漢皇情。それははるけき別れの道。

（『富仁親王嵯峨錦』第二）

○權 朝がほを何はかなしと思ふらん人をも花はさこそ見るらめ（道信）

●はぎにききやうにあさがほを。何はかなしと思ひけんはたちにたらぬまつ風。

（『殺生石』第三）

○紅葉付落葉 不堪紅葉青苔地又是涼風暮雨天 (白)

●たへず紅葉青苔の地と吟ぜしも。御寺の気色よそならず (『花山院都異』第四)

○雲 よそにのみ見てややみなんかづらきやたかまの山のみねの白雲 (讀人不知)

●高まの山のみねの雲我は何ゆへよそにのみみてややみなん (『曾我姿富士』第三)

●我妻ながら余所にのみ。見てややみなんと計に (『日本傾城始』第二)

●葛城や高間の山の嶺の雲の。余所にうかれ給はんより見ぐるしく侍へ共。 (『新板兵庫の築島』第三)

○草 沙頭雨染斑斑草水面風駈瑟瑟波 (白)

●砂頭に雨染むはんくたる草。水面に風かるしつくたる波。三経あれに月も日もいとまあればやながき世も。

(『東山殿室町合戦』第三)

○草 瓢筆屢空草滋顔淵之巷藜藿深鎖雨湿原憲之柩 (直幹)

●身は風雲を住かとしへうたんしばくむなしくて。草がんゑんがちまたにもしげればいとふ人も。かたらふ者ほうば玉の。 (『八幡太郎東初梅』第四)

○鶴 同李陵之入胡但見異類似屈原之在楚衆人皆醉

●うたがふともそしる共衆人は皆酔り。我ひとりさめてもねてもゆだんなく。 (『東山殿室町合戦』第一)

〔注・『楚辞』漁父に「屈原曰く、世を挙げて皆濁りて我独り清めり。衆人皆酔ひて我独り醒めたり」とあり、こちらを利用した可能性が考えられる。但し『東山殿室町合戦』第一にはこの例の他にも『和漢朗詠集』を利用しており、『和漢朗詠集』の典拠の可能性も否定できない。〕

○猿 瑤臺霜滿一聲之玄鶴唳天巴峽秋深五夜之哀猿叫月

●瑤台霜みてり。一声の玄鶴空になき。巴峽秋深し。後家の哀猿月にさけぶ。物冷じき。山路かな

（『末廣十二段』第二）

○猿 江從巴峽初成字猿過巫陽始斷腸（白）

●いばらふし柴身をさきてはらわたをたつ猿よりも。

（『愛護若蟬箱』第四）

●めぐる因果を歎さまはらわたをたつ猿廻し。

（『新板兵庫の築島』第四）

○管絃付舞妓 第一第二絃索秋風拂松疎韻落第三第四絃冷冷夜鶴憶子籠中鳴第五絃聲尤掩抑隴水凍咽流不得

●第一第二の絃はさくくとして。松をはらつてそいとおつ。これ樂天がみつるの友。

（『八幡太郎東初梅』第四）

○管絃付舞妓 ことのねにみねの松風かよふらしいづれのをよりしらへそめけん（斎宮女御）

●琴の音に。峰の松風通ふらじ。いづれの緒よりしらめそめけん。

（『八幡太郎東初梅』第四）

○文詞付遺文 遺文三十軸。軸軸金玉聲。龍門原上土。埋骨不埋名（白）

●たとへ龍門げん上の。土に其身はくつる共ほまれは古今みぞうの。

（『鬼鹿毛無佐志鑑』第四）

●榮花は一時の春の風終に龍門原上に。骨は埋とうづもれぬ譽を末世末代迄。

（『新板兵庫の築島』第三）

○文詞付遺文 いつはりのなき世なりせばいかに人のかたのうれしからまし（よみ人しらす）

（『傾城國性爺』第四）

●めぐる月日にいつはりのなきよ。なりけり神な月

（『傾城國性爺』第四）

○酒 晋建威將軍劉伯倫嗜酒作酒德頌傳於世。唐太子賓客白樂天亦嗜酒作酒功贊以繼之（白）

●めうがにあまる御詞白樂天が酒功のさん。万葉集の七首の和歌長生不老の良葉を。

（『甲陽軍鑑今様姿』第三）

○山寺 千株松下雙峰寺一葉舟中万里身 (白)

●一葉万里の海上も只是一帆の風に任す。 (『鎮西八郎唐土船』第一)

○佛事 願以今生世俗文字之業狂言綺語之誤翻為當來世世讀佛乘之因転法輪之縁 (白)

●狂言きぎよもおのづからさんぶつじやうの因縁と。よそにふかする松風の (『甲陽軍鑑今様姿』第四)

○僧 たらちねはかゝれとてしもうは玉の我くろかみはなてずや有けん

●たらちめは。かゝれとてしもうば玉の。玉のひかりはあきらけき。 (『信田森女占』第四)

○閑居 鶴籠開処見君子書卷展時逢故人

●鶴籠。ひらく所。君子を見る。書卷のぶる時。故人にあふ。月はおぼろに銀燭を。 (『八幡太郎東初梅』第四)

○閑居 人間榮耀因縁浅林下幽閑氣味深

●人間の。ゑいようは。ゐんえん浅アし。りんかの。ゆうかんは。きみふかアし。 (『鎌倉尼將軍』第四)

○餞別 万里東来何再日一生西望是長襟 (野相公)

●万里ひんがしにいたらんこと。いづれのさいじつ一生西にのぞむ。是ながき物思ひと。ひの内にゆふま山。

(『神功皇后三韓責』第三)

○餞別 いのちだに心になふ物ならば何かわかれのかなしからまし (白女)

〔注・第五句「かなしからまし」は『和漢朗詠集』(寛文七年刊)では「かなしかるへき」とある。〕

●げに其歌は命だに心に叶ふ物ならば。何か別れのかなしからまし (『日本傾城始』第四)

○行旅 ほのくとあかしの浦のあさ霧にしまぐれゆく舟をしそおもふ (人丸)

●ほのく。と。あかしのうらの朝ぎりに。島かくれにし身なれども。君にひかるゝ。恋のつな。(『三輪丹前能』第四)

○行旅 わたのはらやそしまかけてこき出ぬと人にはつげよあまのつりふね (簗)

●和田の原。八十島かけてこぎ出る。あまのつり船恋のふね (鎮西八郎唐土船』第四)

○帝王付法皇 刑鞭蒲朽螢空去諫鼓苔深鳥不驚 (江相公)

●けいへんくちてなつの虫かんこは秋のこけをなす。鳥おどろかぬ御代とかや。(『小野小町都年玉』第五)

○親王付王孫 いかるかやとみのをがはのたえばこそわがおほきみのみなは忘れめ (達磨)

●いかるかやとみの。お川のたゑばこそ。我大君の。御名はわすれじと声高にいゝけば。(『仏法舍利都』第四)

○將軍 三尺剣光氷在_レ手一張弓勢月當_レ心

●主君のいかりをなだめんと三尺の劔ひらめかし。いきほひこんでかけよれは。(『吳越軍談』第三)

●いで物みせんと三尺のつるぎのひかりをひらめかし (『殺生石』第二)

●汝は天の罪人也我が三尺の劔こそ。六十余州民力の渴仰帰する財なれば。(『坂上田村麿』第五)

●ばつてう笠に高あしだ。三尺の劔取て横たへことく數も高力士。(『玄宗皇帝蓬來鶴』第二)

●真たゞ中に射あつること。一張のゆみのいきほいたり。第四五六はれいちしん (『傾城無間鐘』第一)

○刺史〔注・寛文七年版『和漢朗詠集』には「判史_{はんし}」と表記〕

たかき屋にのぼりてみれば煙たつ民のかまどはにぎはひにけり (仁徳天皇)

●民のかまどは。(にぎわ) ひけり。(鎌倉尼將軍』第一)

●高雄山の風景より民のかまどの賑ふこそ。朕がながめの紅葉なれ (『富仁親王嵯峨錦』第一)

● 仁徳帝はたかきやに。民のかまども。あつがんのけふりにいとゞめで給ひ。

(『坂上田村麿』第四)

○ 述懷 專諸荊卿之感激侯生豫子之投身心為_レ恩使命依_レ義輕

● 心はおんの。たアめにつかはれ。命は義によ_レつてかるし。

(『鎌倉尼將軍』第四)

○ 述懷 世中はとてもかくてもおなじ事宮もわらやもはてしなければ

(蟬丸)

● 宮もわらやもへだてなき。

(『殺生石』第二)

● かさ神の。宮もわらやも此道はすきの物とてよこづちを。

(『八幡太郎東初梅』第一)

○ 慶賀 うれしさをむかしは袖につゝみけりこよひは身にもあまりぬる哉

(よみ人不知)

● 嬉しさを昔は袖につゝみしが。こよひは身にもあまれ共ならはぬ宿のひとりねに。

(『信田森女占』第四)

○ 祝 君か代はちよにやちよにさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで

● 岸の姫松君か代は。千代に八ちよをさゞれ石。岩ほと成てこけのむす迄

(『本朝五翠殿』第四)

○ 戀 更闌夜静長門閉而不_レ開月冷風秋団扇查而共絶

● 既に更たけ。夜静に。くるまきの井もねるころと

(『頼光新跡目論』第四)

○ 戀 春風桃李花開日秋露梧桐葉落時

(白)

● 春風桃李花開日。秋露梧桐葉落時。歡樂憂思のゑんげんたる。

(『玄宗皇帝蓬來鶴』第一)

○ 無常 蝸牛角上争_ニ何事_ニ石火光中寄_ニ此身_ニ

(白)

● くわぎうのつの世の中に。何はかなしや石の火のかりのかたちをよしやあし。

(『鎌倉尼將軍』第四)

● 栄花を栄花と思ふよな。くはぎうの角のしやばせかい。いつまで生をむさぼらん。

(『東山殿室町合戦』第一)

紀海音と『和漢朗詠集』

○無常 生者必滅釋尊未_レ免_二梅檀之煙_一樂盡哀來天人猶逢_二五衰之日_一 (江相公)

●天人五すいの日にあへり

(『鎌倉尼將軍』第四)

○無常 朝有_二紅顏_一誇_二世路_一暮為_二白骨_一朽_二郊原_一 (義孝少將)

●朝のこうがん引かへて白こつと成ル化世と。あすの。命はしらね共。

(『新百人一首』第二)

○無常 世中を何にたとへんあさぼらけこぎゆく舟のあとの白浪 (満誓法師)

●よの中は何にたとえん朝ぼらけ。こぎゆく舟の跡の白なみ。ア、そうじやものく

(『仏法舍利都』第二)

○無常 手にむすぶ水にやどれる月影のあるかなきかの世にもすむ哉 (貫之)

●水にやどれる月かげのあるかなきかの夢の世は。

(『鎌倉尼將軍』第四)

●みつれはかくる月影の有かなきかの世の中と。

(『日本傾城始』第三)

○無常 末の露もとのしづくや世中のをくれさきだつためしなるらん (良僧正)

●草葉における末の露。もとの雫と今ぞしる。

(『義經新高館』第四)

〔注・『和漢朗詠集註』と寛文七年版『和漢朗詠集』とは、「手にむすぶ」歌と「末の露」歌の掲載順序が逆になっている。ここでは『和漢朗詠集註』の順序に従った。〕

おわりに

近松の利用した『和漢朗詠集』の和歌・詩文について『近松語彙』を基にして調査すると、海音の利用したものと

一部共通しているものも指摘できる。近松の利用した『和漢朗詠集』の見出し、及び近松の時代物浄瑠璃作品について示せば次のようになる（なお、海音も共通して利用したものについては、◎印を見出しの前に付すことにする）。

◎早春（『浦島年代記』、『国性爺後日合戦』）、春夜（『天智天皇』）、子日（『けいせい反魂香』、『国性爺合戦』）、三月三日（『本領曾我』）、梅（『雪女五枚羽子板』）、納涼（『天鼓』）、◎八月十五夜付月（『国性爺合戦』）、女郎花（『弘徽殿鶉羽産家』）、権（『けいせい懸物揃』、『燦静胎内拵』）、雪（『源氏れいぜいぶし』）、雲（『主馬判官盛久』）、暁（『弘徽殿鶉羽産家』）、松（『傾城酒吞童子』）、◎猿（『姫山姥』）、山家（『傾城吉岡染』、『弘徽殿鶉羽産家』）、帝王（『せみ丸』、『姫山姥』）、◎將軍（『日本武尊吾妻鑑』）、將軍（『曾我五人兄弟』）、◎無常（『百日曾我』、『国性爺後日合戦』）、無常（『源義経将基経』）。

近松の『和漢朗詠集』利用は、海音が自分の作品のほとんどすべてに利用したことからみれば、その割合は海音の場合と比して半分以上となる。海音がこのように高い割合で利用した原因についても興味深いものがあるが、ここではこれ以上は踏み込まない。

また、もう一つ興味ある問題としては、詩文の文句を音曲としての浄瑠璃にどのように取り入れたかという点である。勿論、冒頭部大序では、荘重な語り出しの特徴として漢詩文を利用することは一般的な方法である。海音の場合も、『玄宗皇帝蓬来竊』の大序（ここでは作品冒頭部）で、『春風桃李花しゅんふうとうりはなはなのおつるもはな開日しゅうろくどうはなのおひるひ。秋露梧桐葉落時しゅうろくどうはなのおひるひ。歡樂憂思くはんろくどうはなのおひるひのゑんげんたる』と始められる。注目すべき一つはその表記の仕方であろう。また、時代物の大序は作品の主題を述べると共に一段目の主題を述べるものとされるが、この冒頭部分に引用された詩文は、『和漢朗詠集』の見出しが「戀」であり、続く楊貴妃との文脈からも主題を語るに相応しい詞章と判断される。但し、大序での『和漢朗詠集』利用はこの

一例のみであり、多くの場合はそのような利用の仕方ではない。では、浄瑠璃の詞章の特徴である五文字・七文字の字割りの中で、訓読の文体はどのように処理されているのであろうか。

一つには、「詞」の曲節の中で処理される。会話表現で語る部分であるため、この曲節の部分では五文字・七文字の字割りの制約をあまり受けないからである。それでは、「地（あるいは「地色」）の曲節ではどうであろうか。一例を挙げてみたい。『和漢朗詠集』「草」の見出しでは、「瓢筆^{ヒョウシツ} 屢^ル 空^ク 草^{クサ} 滋^シ 顔淵^{カネツル} 之^ノ 巷^{チヤウケン} 藜^{レイ} 藿^{コク} 深^{シン} 鎖^サ 雨^{アメ} 湿^{シツ} 原^{ゲン} 憲^{ケン} 之^ノ 枢^{コトハサ}」と訓読している。これに対して海音の『八幡太郎東初梅』第四では、「身は風雲を住かとしへうたんしばくむなしくて。草がんとんがちまたにしもしげればいとふ人も。かたらふ者はうば玉の」とある。「空」は「むなしくて」、「草^{クサ} 滋^シ 顔淵^{カネツル} 之^ノ 巷^{チヤウケン}」を「草がんとんがちまたにしもしげれば」と改変させて利用している。そのままの表現を取り込むというものではない。詩文の表現を短く分割し、その分割した部分に改変・修正を加えることにより、訓読のリズムから浄瑠璃の語りのリズムへと転換する表現方法を取っていたのではなからうか。この点についてもまた改めて考えてみたい。

注

1 海音の時代物浄瑠璃三六作品中、『平安城細石』は加賀掾正本の『平安城』（『平安城都遷』）を改作したものであると指摘されており、詞章に関してもそっくりそのまま取り入れた部分が多い。よって今回の調査からは除外し、三五作品を調査の対象とした。

2 この特徴は、以前「紀海音と『伊勢物語』の和歌」（『国語国文研究』1110号〈平成10年11月〉、後、『海音と近松』〈平成16年3月・北海道大学図書刊行会刊〉に再録。）の中で、和歌利用に関して指摘したことがあるが、その傾向と非常に類似している。参照頂

きたい。

3 『和漢朗詠集註』、『和漢朗詠集』(寛文七年刊)とも同じ。